

## 時間的態度とパーソナリティの関係

甲 村 和 三

人文社会教室

(1993年9月3日受理)

### The Relations between Attitudes toward Time and Personality Types

Kazumi KOHMURA

Department of Humanities

(Received September 3, 1993)

In this survey study, 547 college students were asked to answer a questionnaire on their daily time attitudes in order to investigate the relations between time attitudes and personality types. Four factors were derived as a result of factor analysis for self-ratings on time attitudes. These were named *time anxiety*, *future perspective*, *time utilization*, and *time imagery*, respectively. Mean factor scores and profiles of self-ratings were examined to investigate the difference of time attitudes in each of personality types tested by the YG-Personality Inventory. Factor scores of time anxiety and time perspective in E and B type-subjects who were unstable and maladjusted showed high tendencies in comparison with those in D and C type-subjects. These results indicate that the more getting unstable and irritable, people come to be more anxious about the passage of time and their future perspective.

#### はじめに

時間意識 (時間についての一般の見方), あるいは時間観 (時間意識に価値的意識を加えた見方) に関する研究は, フッサール (Husserl, E.)<sup>10)</sup> の内的時間意識に関する現象学で注目され, その後ベルグソン (Bergson, H.) やハイデッガー (Heidegger, M.) ら実存主義的哲学に基本的には継承された主題であると言ってよいであろう。滝浦 (1976)<sup>35)</sup> によれば, 現象学的時間論では, 時間は 'ある' ものではなく, われわれの経験の意味として語り出されるものであり, われわれは実在の出来事に触発されて受動的に時間の言葉を語り出すものであるという。本研究では, 先の研究<sup>17,18,19,20)</sup> に引き続き時間の心理的意味を追究するが, それは時間に関する行動体験や態度傾向の分析的接近を意図した調査的研究であり, 現象学的時間論に基づく人の経験の意味としての時間意識・時間観 (これらを総称して本研究では「時間的態度」と呼ぶことにする) についての因子的構造を明らかにすることを目的とするものである。

経験の意味としての時間の追究には, 個々人の時間経

験を明らかにして比較的共通する部分について体系化し, その構造を明らかにする必要がある。本研究はそのような意図で筆者がこれまで進めてきた時間意識・時間観研究<sup>16,17,18,19,20)</sup> の継続として実施するものである。特に, 先の研究<sup>17,18,19,20)</sup> では「時間」という言語的概念のイメージをSD法 (Semantic Differential Method) により調べたが, 難治性疾患者の時間イメージが健常者のそれと異なるなど, 人がおかれた生活状況による時間のイメージの違いが示唆された。しかし, 「時間」という抽象的概念イメージを形容語の意味差から構成するには限界があった。そこで, 時間の心理的意味を明らかにするには人々の時間意識や行動などのいわゆる時間経験の意味を積極的に分析し, それに基づく体系化を試みる必要に到った。それには時間に関連した人々の具体的な行動体験や態度傾向の分析が必要となる。本論文はこのような見解に基づき実施された日常生活における時間体験や時間意識などについての調査報告である。

ところで, 時間態度に関する心理学的研究はそれほど多くはない。主だったものとしては, 時間イメージ (時間に対する漠然たる印象) と達成動機の関係調べた

Eissler, K.R. (1952)<sup>7)</sup>, 時間への態度と達成動機との関係を検討した Knapp, R.H. & Garbutt, J.T. (1958)<sup>14)</sup>, Knapp, R.H. (1962)<sup>15)</sup>, 健常者の他にヒステリーや精神疾患者の時間評価や時間体験を検討した Orme, J.E. (1964)<sup>30)</sup>, 時間的態度の構造に関する検討を行った Calabresi, R. & Cohen, J. (1968)<sup>1)</sup>, 時間体験と独断的態度尺度 (dogmatism scale) などとの関係を調べて時間不安と達成動機との関係を論じた Cottle, T.J. (1969)<sup>3)</sup>, 1971<sup>4)</sup>, 時間的体験の因子分析的研究を通して現実的切迫感, 長期的方向性, 時間活用性, 不安定性の4尺度から成る内的時間体験質問紙を構成した Wessman, A.E. (1973)<sup>37)</sup>, 時間体験検査を用いた研究の中で自己実現値, 創造性の高い人は時間の中で自由にゆとりを持った生き方をしていることなどを明らかにした Yonge, G.D. (1975)<sup>38)</sup>, 女子学生を対象としてそのアイデンティティ確立と Wessman の Temporal Experience Questionnaire 得点の関係を調べた武内 (1988)<sup>33)</sup>, 時間不安と自我同一性・達成動機・自己像の関係を調査した根本・中沢 (1990)<sup>26)</sup>, パーソナリティ特性としての時間厳守行動様式 (punctuality style) を扱った Richard, D.R. & Slane, S. (1990)<sup>31)</sup> などである。これら多くは個人の時間経験と個人属性との関係を調べたものである。

時間の心理的意味構造を明らかにすることを主眼とする本研究では, 上述の Calabresi, R. & Cohen, J. (1968)<sup>1)</sup>, Wessman, A.E. (1973)<sup>37)</sup>, 武内 (1988)<sup>33)</sup> の研究で用いられた質問項目を参考に, また, 筆者の以前の研究<sup>16)</sup> で用いた時間意識に関する項目を加えて『時間的態度に関する調査』と名づけた40項目から成る質問紙を構成した。なお, 矢田部-ギルフォード (YG) 性格検査を併せて実施し, 個人属性として性格型の違いによる時間的態度の違いも検討する。

## 方 法

**質問紙:** 調査項目は Wessman, A.E.<sup>37)</sup> の Ricks-Epley-Wessman Temporal Experience Questionnaire, Calabresi, R.<sup>1)</sup> が用いたパーソナリティと時間的態度あるいは時間体験に関する調査項目の中から30項目を選び, さらに筆者ら<sup>16)</sup> が筋ジストロフィー患者の時間的展望を調べるために用いた調査項目などから25項目を加えて当初 100項目を選定した。予備調査の過程で類似性の高い項目および時間的態度に関係なさそうな, どちらかといえばパーソナリティ検査関連と思われる項目を削除し, 最終的には別表に示す40項目から成る『時間的態度に関する調査』を作成した。評定は“全くそうである (5点)” “かなりそうである (4点)” “ややそうである (3点)” “あまりそうではない (2点)” “ほとんどそう

ではない (1点)” “全くそうではない (0点)” の評点を与え, “わからない” の回答は? にマークさせて統計処理からは除外する。なお, 個人属性指標として用いる目的で YG 性格検査を併せて実施する。

**調査対象者:** 工学系大学・医療専門学校などに在学中の1・2年生の大学生男子340人, および工学系・看護系短期大学・医療専門学校在学中の1・2年生 (女子207人, 合計547人)。

**結果の処理:** 40の質問項目各々についての評定段階別頻度分布 (“わからない” も回答カテゴリーに含める), 平均評定値 (“わからない” とする回答を欠損値扱いとする) ・標準偏差 (s d) などを算出した。また, 因子分析は主因子法による因子分析 (欠損のある回答, および “わからない” の回答は, ペア単位除去により処理) を行うとともに, 同時に実施した YG 性格検査による性格型の違いによる評定傾向の比較, および特定質問項目の回答傾向 (肯定群-否定群) による評定傾向の比較などを試みる。

## 結果と考察

### I. 因子分析結果

40の質問項目群について, 主因子法による因子分析の結果, 固有値1.00以上の因子は4つ抽出された。これらについて Varimax 回転を行い最終因子解とした。Table 1は回転後の因子負荷量  $|\pm .300|$  以上の項目を因子別に, 負荷量の高い順に並べ替えて示したものである。これら4因子は全分散の25.47%を説明していた。抽出された因子について以下のような解釈とそれに基づく naming を試みた。

**第I因子:** 「焦りを感じやすい方である」「過ぎてしまったことをいつまでもくよくよ考えることが多い」「時間が経つのが気になる方である」「毎日が時間に追いかけてられているようだ」「将来のことについていろいろ気になることが多い」「何をするにもせっかちである」などの因子負荷量が高く, これらはいずれも同一符号 (正) の因子負荷量を示している。項目間の意味的内容の関係から時間経過に対する不安とか焦りのような心情に関する項目群と言ってよいであろう。これまでの諸家の研究<sup>1,37)</sup> における因子名も参考にして時間経過に対する不安, すなわち『時間不安』と名づける。

**第II因子:** 「何となく毎日を過ごしている」「大きな目標に向かって, 毎日の生活を過ごしている」「自分の将来がどうなるか予想できない」「毎日の生活に飽き足りなさを感じる」「将来のことについては, どうしようもないと思っている」などの項目の因子負荷量が高い。自分の将来に対する漠然とした不安や展望, あるいは将

来に連結しない現在の生活態度などが混在しているような項目群であり、ひとまず『将来展望』と名づける。

Table 1 Result of factor analysis.

項	目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	$h^2$
25	焦りを感じやすい方である	.633	.127	.053	-.012	.420
30	過ぎてしまったことをいつまでもよくよく考えることが多い	.571	.070	-.085	-.037	.340
34	時間が経つのが気になる方である	.488	.097	-.027	-.150	.271
12	毎日が時間に追いかけているようだ	.454	-.038	-.188	-.334	.355
28	将来のことについていろいろ気になることが多い	.440	-.064	-.103	-.318	.310
6	何をすることもせっかちである	.434	.122	.168	.089	.240
2	やらなければならないことをするのに十分な時間がないと感ずることが多い	.405	.064	-.207	-.261	.279
21	やり残していることが多いように思う	.373	.254	-.304	-.302	.387
31	昔はよかったと思うことが多い	.362	.171	-.100	-.115	.183
24	人に待たされるとすぐにイライラする	.344	.160	.067	.067	.153
35	自分のはのんびりや(楽道家)である	-.306	.065	-.257	-.197	.203
17	何となく毎日を過ごしている	.112	.682	-.138	-.048	.499
10	大きな目標に向かって毎日の生活を過ごしている	.110	-.639	.043	-.146	.443
4	自分の将来がどうなるか予想できない	.198	.540	-.038	-.099	.342
19	毎日の生活に飽き足りなさを感じる	.175	.490	-.031	-.010	.272
8	将来のことについてはどうしようもないと思っている	.137	.428	-.062	-.187	.240
26	一つのことに熱中できずすぐに退屈を感じる	.314	.409	-.235	.011	.321
18	何年も先のことまで考える	.254	-.371	-.014	-.076	.208
3	気が変わりやすい	.317	.341	-.142	0.49	.239
14	仕事をし終わるのはいつも期限ギリギリである	.192	.127	-.569	-.130	.394
27	約束時間には厳格な方である	.115	.089	.548	-.178	.353
9	仕事にかかるまでに多くの時間を費やしてしまう	.295	.232	-.506	-.096	.406
13	何をすることも時間がかかる	.398	.056	-.499	-.169	.439
1	スケジュールに従って敏速かつ能率的に行動する	.146	-.178	.499	-.002	.302
22	締め切りには必ず間に合わせるようにする	.110	-.104	.498	-.164	.298
16	何をすることも前もって予定を立てる	.252	-.257	.307	-.115	.238
38	時間は途切れることなく続くように感じられる	.106	-.010	.039	-.691	.490
36	時間は直線的に(真つすぐに)進むように感じられる	-.048	.084	.019	-.518	.278
15	人生とは死ぬまで続く長い糸のようなものだと思う	.068	-.048	-.048	-.395	.166
33	この頃1日の時間を短く感じる	.286	-.111	-.102	-.372	.243
40	時間は他の何ものの影響も受けない絶対的なものと思う	-.015	-.010	-.041	-.308	.097
5	自分のことをよく知っていると思う	.019	-.190	.123	.026	.052
7	毎日の生活が連続的なものであると感じる	.171	-.002	-.029	-.285	.111
11	古くなったものは捨ててしまって新しいものにかえたいと思っている	.180	.182	-.052	.002	.068
20	何事につけてマイペースでやっていく	-.116	-.135	-.092	-.190	.076
23	ある一つのことをやり遂げることは難しい	.215	.232	-.225	-.219	.199
29	人を待たせてもそれほど気にならない	.062	.072	-.268	.139	.100
32	仕事は早く仕上げるよりも正確にすることの方が大事だと思う	.104	-.092	.055	-.233	.077
37	時間はぐるぐると回転しながら進むように感じられる	.145	.043	.032	-.063	.028
39	時間はその日によって感じ方が違う	.198	.114	.005	-.143	.073
	因子負荷量 2 乗和	3.266	2.568	2.293	2.063	
	寄与率 (%)	8.165	6.419	5.732	5.157	
	累積寄与率 (%)	8.165	14.584	20.316	25.474	

**第Ⅲ因子：**「仕事をし終わるのは、いつも期限ギリギリである」「約束時間には厳格な方である」「仕事にかかるまでに多くの時間を費やしてしまう」「スケジュールに従って、敏速かつ能率的に行動する」「締切りには必ず間に合わせるようにする」などの項目の因子負荷量が高い。時間厳守と言った態度や仕事の能率などに関する項目群と言ってよいであろう。そこで『時間活用性』と名づける。

**第Ⅳ因子：**「時間は途切れることなく続くように感じられる」「時間は直線的に(真っすぐに)進むように感じられる」「人生とは死ぬまで続く長い糸のようなものだと思う」「この頃、1日の時間を短く感じる」などの項目の因子負荷量が高い。時間に対する比喩的表現あるいは漠然としたイメージのような項目群であろう。そこで、『時間観』と名づける。

以上の抽出された因子とこれまでの諸家の研究で見出された因子との関係を考察する。

Calabresi, R. & Cohen, J. (1968)<sup>11)</sup>は、学生や神経症患者らを対象として46項目からなる時間的態度 (Time Attitude) の構造に関する資料を因子分析し、「時間不安 (Time Anxiety) ; 時間の流れに対する不安, 不確かな未来に対する恐れ, 日常の決まりきった行動への固着」「時間的服従 (Time Submissiveness) ; 時間に従う態度であり, 時間厳守, 時間の有効使用の態度」「時間の所有 (Time Possesiveness) ; 時間に対する貪欲な態度」「時間的柔軟性 (Time Flexibility) ; 時間に対する受容的で柔軟な態度」の4因子を抽出している。Calabresiら<sup>11)</sup>の「時間不安」と「時間的服従性」は、本調査研究における「時間不安」「将来展望」「時間活用性」に類するものであろうが、「時間の所有」「時間的柔軟性」については健常大学生のみを対象とした本研究とはいささか異質のもののように思われる。また、日本人の時間観では理解しにくい時間的態度であるように思われる。

また, Cottle, T.J. (1969<sup>4)</sup>, 1971<sup>5)</sup>) は, 39項目から成る Time Attitude Inventory の因子分析により, 「時間不安 (Temporal Anxiety)」「自己中心的現在志向性 (Egocentric Present Orientation)」「空想不耐性 (Fantasy Intolerance)」[因子訳語は根本・中沢 (1990)<sup>26)</sup>による] の3因子を見出している。用いた項目の特徴の故と思われるが, ここでは個人の適応行動のあり方や生き方と時間的態度との関連性が強調されているようである。中でも時間不安においては独断的態度 (dogmatism) や達成的価値態度との関連が示されている点に Cottle の特色があろう。

さらに, Wessman, A.E. (1973)<sup>37)</sup> は201項目から成る Temporal Experience Questionnaire を大学生に実施

し, 因子分析の結果4因子を抽出し, それに基づく100項目から成る Ricks-Epley-Wessman Temporal Experience Questionnaire (TEQと略記される) を構成している。TEQでは「現実切迫感 (Immediate Time Pressure) ; 時間的混乱及び統制の欠如と, 時間に対する柔軟な適応性及び寛大な統制を両極とした次元の構成」「長期的方向性 (Long-term Personal Direction) ; 時間的な連続性及び確固とした目的意識と, 時間的な不連続性及び方向性・目的性の欠如を両極とする次元」「時間活用性 (Time Utilization) ; 効率性及び計画性と, 遅延及び非効率性を両極とする次元」「不安定性 (Personal Inconsistency) ; 不安定性及び変動性と, 一貫性及び信頼性を両極とする次元」の4尺度 [各尺度の訳語と説明は武内 (1988)<sup>33)</sup>による] が, 各20項目盛り込まれている。因子の命名は多少異なり, また項目分類も多少異なるが, Wessman のものは内容的に本調査結果と類似性が高いと思われる。すなわち, 対象や項目数, 項目の表現や回答形式などに違いはあるが, 本調査で得られた『時間不安』『将来展望』『時間活用性』関連項目が盛り込まれている点で類似性が高い。しかし, 『時間観』関連についてはTEQの項目としてはあまり含まれていないようである。逆に, 本研究ではTEQの不安定性次元項目が十分盛り込まれておらず, 不安定性は単独因子として抽出されなかったと言えよう。

## II. 抽出された4因子の特徴

周知のようにそれぞれの個体の共通因子の値が因子得点 (Factor Score) と呼ばれる。ここでは個体の属性別に平均因子得点を算出し, 平均評定値による傾向と併せて抽出因子の特徴について属性比較を試みる。

### (1) 男女比較

Fig. 1 に第Ⅰ～Ⅳ因子の男女別平均因子得点が図示されている。これによると, 性差が比較的顕著に現れているのが第Ⅱ (将来展望) と第Ⅳ因子 (時間観) についてである。将来展望と時間観については男子と女子の因子得点が反対傾向にあることが明瞭である。

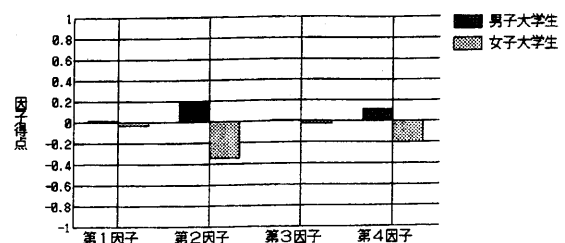


Fig. 1 Mean factor scores in male and female subjects.

この点を中心に Fig. 2 に示した平均評定プロフィールで因子別に検討してみると, 男子と女子の平均評定プロフィール自体は総じてよく似ている。各項目の量的差

が認められる (図中, \*\*\*p < .001, \*\*p < .01) のは, 第II因子 (将来展望) と第IV因子 (時間観) に属するいくつかの項目についてであった。それは平均因子得点比較ですでに明らかとされたことである。すなわち, 「将来展望」においては, 男子の高い評定値傾向, つまり将来予測困難, 将来不安, 現状不満などの傾向が顕著である。また, 「時間観」については, 女子の方が高得点傾向であり, 時間の連続性や, 1日の短い感じを回答する傾向は女子に顕著である。また, この傾向は先のSD法による「時間」の言語的イメージ研究<sup>17)</sup>において見られたように, 男子に比べて「時間」に対して sensitive な反応をしている (過敏な態度や印象を持っている) ように思える回答傾向であった。なお, 他の2つの因子, すなわち「時間不安」と「時間活用性」の因子については評定値における性差と言うべき統計的差異は認められなかった。

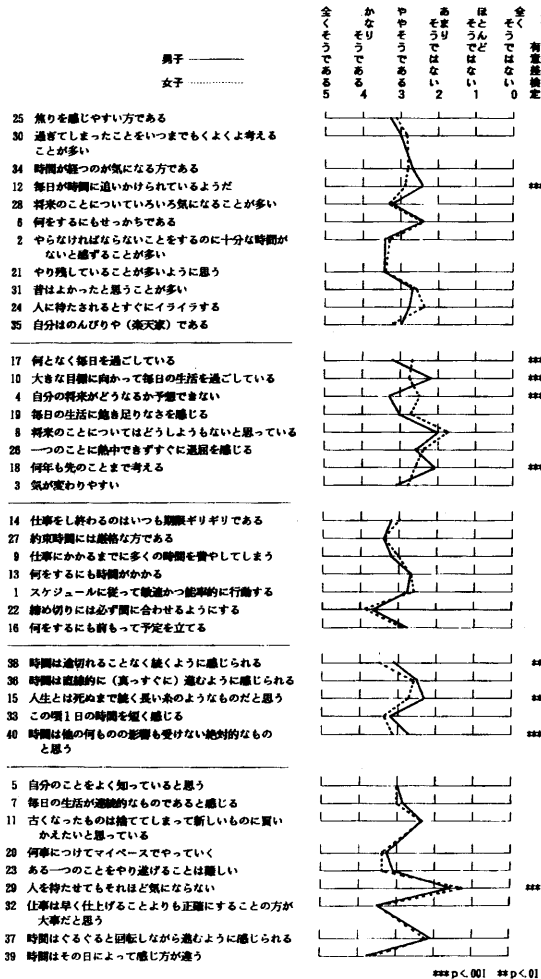


Fig. 2 Profiles of mean self-ratings to a questionnaire on time attitude in male and female subjects.

(2) 性格類型比較

次に, YG性格検査類型別に因子得点の傾向を検討してみる。Fig. 3は4因子それぞれにつき性格類型別平均

因子得点分布を示したものである。

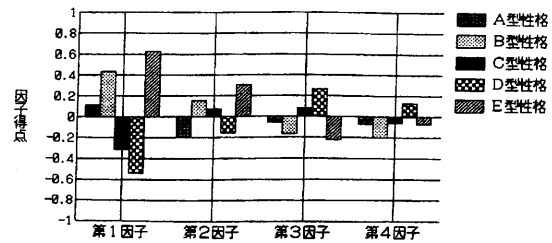


Fig. 3 Mean factor scores in each of personality types tested by the YG-Personality Inventory.

対照的性格型としてD型(精神的安定・適応・積極型)139人とE型(精神的不安定・不適応・消極型)67人, B型(不安定・不適応・積極型)67人とC型(安定・適応・消極型)64人とみて, これらの比較を主に試みることにする。なお, A型(平均型)71人はD, E型プロフィール比較図 (Fig. 4) に入れることにする。

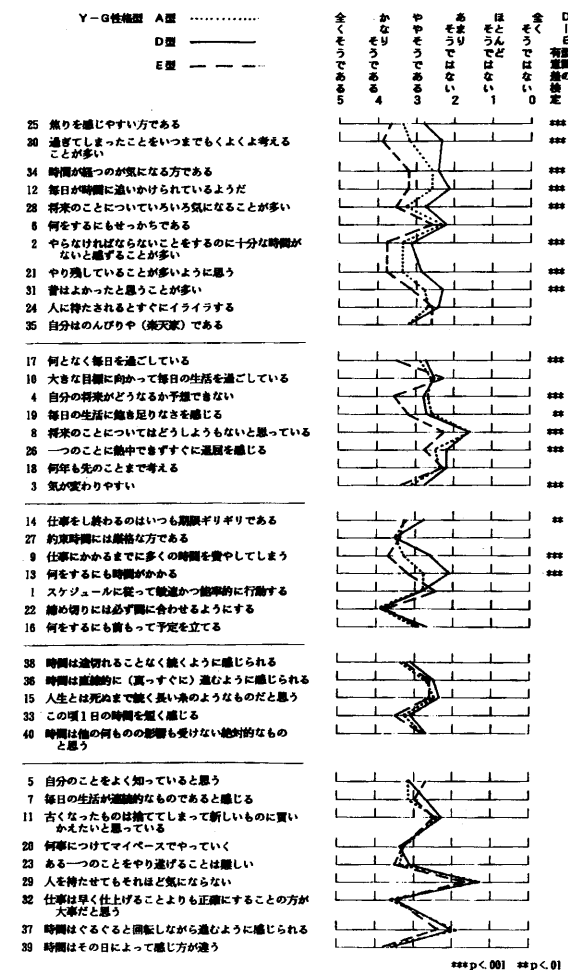


Fig. 4 Profiles of mean self-ratings to a questionnaire on time attitude in each of D, E, A types tested by the YG-Personality Inventory.

平均因子得点分布によれば, 特に第I因子 (時間不安) におけるD型とE型群, およびB型とC型群の間に傾向

差が顕著である。BとEは同一方向(符号)、CとDも同一方向(符号)を示しており、精神的不安定-安定性、積極-消極性の次元的影响が共通因子化傾向の特徴を現出したものと思われる。そこで、これら比較群の評定値傾向を見る(Fig. 4, 5)と、第I因子については、E型群の平均評定値がほとんどの項目においてD型群のそれを凌駕している。また、B型群の平均評定値のほとんどもC型群のそれを上回り、どの項目についてもより肯定的である。従って、EとB型群の共通傾向として精神的不安定傾向と不適応傾向があることから、第I因子(時間不安)は精神的不安定・不適応傾向と密接な関係のある因子であり、そうした性格傾向の者の評定値は関連項目により肯定的評定を与えたと言することができる。

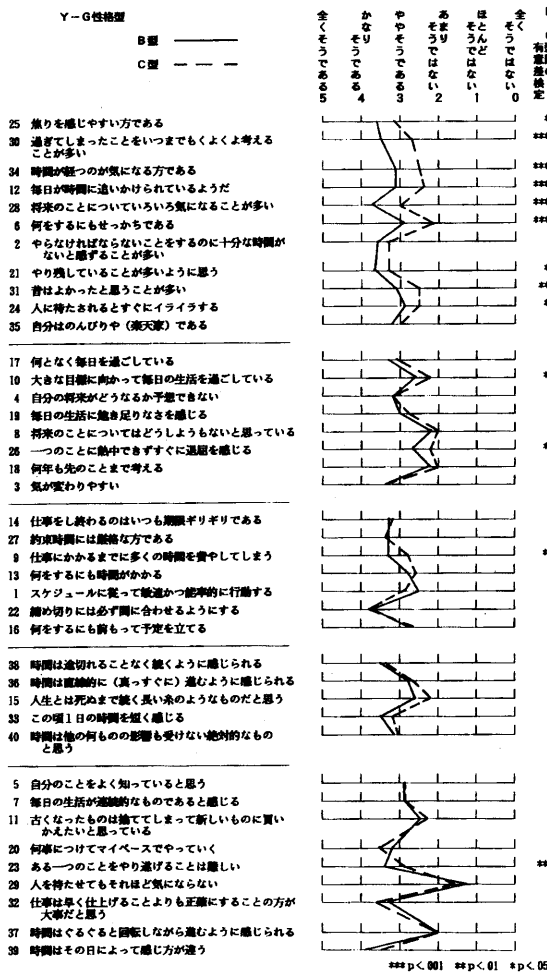


Fig. 5 Profiles of mean self-ratings to a questionnaire on time attitude in each of B, C types tested by the YG-Personality Inventory.

第II因子(「将来展望」因子)についてもほぼ同様のことが言えるが、B, C, E型群が因子得点において同一符号であり、D型群と対照的である。第II因子(将来展望)の平均評定値プロフィールによれば、特にE, B群の評定値はD群のそれに比べると高い。従って、精神

的不安定・不適応傾向と第II因子は関連が深く、そのような性格傾向者の評定では、第II因子関連項目に対してより肯定的評定をしたと言することができる。

第III(時間活用性)、第IV(時間観)因子はI, II因子ほどに明瞭な性格型による因子得点傾向の差異は認められなかった。僅かに第III因子(時間活用性)におけるDとE型群の間に傾向差が目立つ程度である。これも平均評定値プロフィールによればE型群にいくらか高い評定値傾向が見られることから、E型傾向者は時間の使い方をかなり気にするタイプであるとみることができよう。

### III. 特定質問項目における肯定的評定者と否定的評定者群の因子別評定傾向の比較

次に、用いた40の質問項目の中で時間の経過に対する意識、約束時間に対する厳格さや、待つことに伴う感情などの時間意識や時間行動などに関する5項目を規準項目として回答者群を大きく肯定群([A群]:評定段階で3, 4, 5点の回答者を合算) - 否定群([N群]:評定段階で0, 1, 2点の回答者を合算)に分類し、平均因子得点比較を試みた。結果はFig. 6, 7, 8, 9, 10に示されている。また、Table 2は当該5項目について評定段階(0~5点)別平均因子得点についての一元配置分散分析結果を示したものである。

問24「待たされるとイライラする」の平均因子得点分布(Fig. 6)を見ると、肯定群と否定群で得点符号が異なり、量的差異も顕著なものは第I因子(時間不安)についてである。平均評定値(紙数の関係で表示しない)を調べると、第I因子に含まれるほとんどの項目における平均評定値は肯定群で高い評定傾向を示していた。言い換えれば、待たされるとイライラする人はそうでない人に比べて、焦りを感じやすい(肯定群[A]:平均評定値3.64, 否定群平均評定値[N]:平均2.80)・過ぎたことをくよくよ考える(A:3.09, N:2.89)・時間が経つのが気になる(A:2.87, N:2.51)・毎日が時間に追いかけているようだ(A:2.73, N:2.46)などの傾向が強いと言える。また、35自分のはのんびりや(楽道家)であるの項目のみが肯定群の平均評定値が低く(A:3.00, N:3.13), 待たされてイライラする人はあまりのんびりやではないとする結果である。これら項目が時間不安関連項目であることから結果の理解は容易であろう。

問34「時間が経つのが気になる方である」の平均因子得点分布(Fig. 7)を見ると、この問も第I因子(時間不安)について肯定回答群と否定回答群の差異が顕著である。この問については平均評定値傾向においてもほとんど問24と同じ傾向であった。

問33「この頃1日の時間を短く感じる」の平均因子得

Table 2 Analysis of variance on mean factor scores of the questions included in the factor of time imagery.

項目	因子	F 値	有意検定
(24)	FAC1	23.90	***
	FAC2	5.83	***
	FAC3	1.10	
	FAC4	1.40	
(27)	FAC1	5.05	***
	FAC2	2.87	*
	FAC3	86.92	***
	FAC4	5.77	***
(33)	FAC1	16.97	***
	FAC2	4.58	***
	FAC3	1.84	
	FAC4	31.31	***
(34)	FAC1	58.73	***
	FAC2	2.15	
	FAC3	2.93	*
	FAC4	9.66	***
(39)	FAC1	9.45	***
	FAC2	2.74	*
	FAC3	0.33	
	FAC4	7.61	***

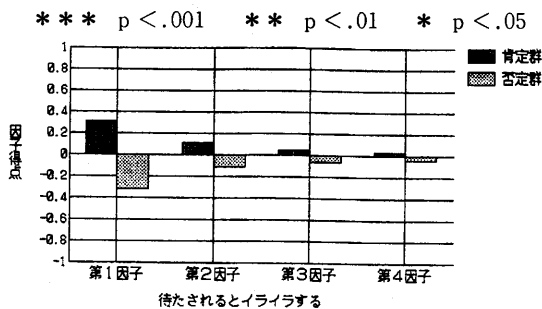


Fig. 6 Mean factor scores in subjects who answered yes to the question number 24 and those in subjects who answered no to it.

点分布 (Fig. 8) を見ると、肯定回答群と否定回答群での差異が顕著なのは第IV因子 (時間観) についてである。第IV因子に含まれる項目群の平均評定値を調べると、平均評定値は肯定群においてより高い傾向を示していた。例えば、38時間は途切れることなく続くように感じられる (A:3.35, N:2.94)、36時間は直線的に進むように感

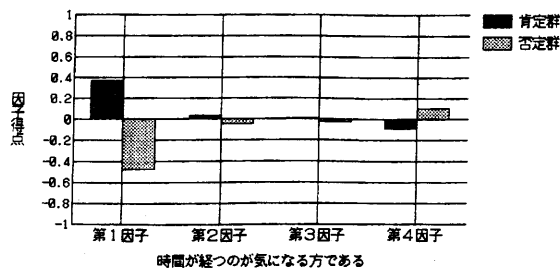


Fig. 7 Mean factor scores in subjects who answered yes to the question number 34 and those in subjects who answered no to it.

じられる (A:2.63, N:2.36)、15人生とは死ぬまで続く長い糸のようなものだと思う (A:2.51, N:2.12) などである。1日の時間を短く感じる人が、なぜ時間のこうしたイメージを抱くことになるのかは推測の域をでないが、1日を短く感じる回答者群が僅かではあるが第I因子 (時間不安) 項目の評定値も高いことから、時間の不足や時間的制約を気にするタイプであると思われる、「時間」の速く・連続的経過イメージを形成するのではないかと思われる。

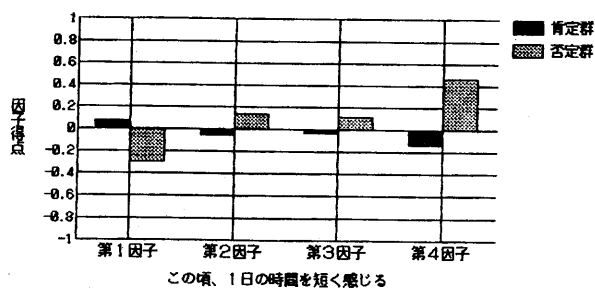


Fig. 8 Mean factor scores in subjects who answered yes to the question number 33 and those in subjects who answered no to it.

問27「約束時間には厳格な方である」の平均因子得点分布 (Fig. 9) を見ると、これについては第III因子 (時間活用性) について肯定群-否定群の差が著しい。第III因子関連項目の平均評定値を調べると、14仕事をし終わるのはいつも期限ギリギリである (A:3.00, N:3.48)、9仕事にかかるまでに多くの時間を費やしてしまう (A:3.00, N:3.36)、13何をするにも時間がかかる (A:2.57, N:2.90) については、肯定群の方がむしろ評定値は低い。つまり約束時間に厳格な人は、時間的“ゆとり”のある (あるいはそれを求める) タイプであると言える。また、1スケジュールに従って敏速かつ能率的に行動する (A:2.81, N:2.38)、22締切には必ず間に合わせるようにする (A:4.00, N:3.25)、16何をするにも前もって予定を立てる (A:2.88, N:2.61) であり、時間効率・行動の敏速を旨とする傾向が窺える。

問39「時間はその日によって感じ方が違う」の平均因子得点分布 (Fig.10) を見ると、これはどの因子につい

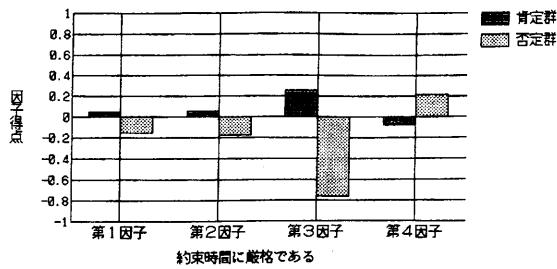


Fig. 9 Mean factor scores in subjects who answered yes to the question number 27 and those in subjects who answered no to it.

でも肯定回答者群と否定回答者群の差は顕著ではなく、第I因子についての違いが僅かに認められる程度である。第I因子関連項目群の平均評定値を調べても肯定群-否定群での差異は認められなかった。換言すれば、第I~IV因子に含まれるほとんどすべての項目において、回答の肯定-否定に関係なく、回答者のほとんどの人々が時間の感じ方が、その日その時の心的状況によって違うと感じていることを示唆した結果であると言える。

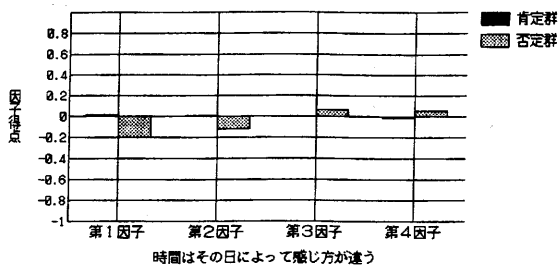


Fig.10 Mean factor scores in subjects who answered yes to the question number 39 and those in subjects who answered no to it.

### III. 時間観に関する項目についての評定傾向

「時間不安」・「将来展望」・「時間活用性」については、これまでの結果の論述において多くを考察することができたが、平均因子得点や評定値についての回答者属性による比較ではほとんど差異がなかった「時間観」諸項目について評定値段階別頻度分布 (Fig.11) により詳しく吟味してみる。なお、因子負荷量の因子別設定規準 (便宜的に  $|\pm .300|$  と定めた) 以下の因子負荷量を持つ項目でも、本来、時間観を見る目的で加えた若干の項目について併せて検討する。

Fig.11の「時間観」関連項目評定値段階別頻度分布によれば、肯定的評定(「全くそうである」「かなりそうである」「ややそうである」を合算)が50%を超える項目としては、「時間は途切れることなく続くように感じられる (74.9%, 平均評定値3.26) ”

“この頃、1日の時間を短く感じる (75.9%, 平均評定値3.28) ” “時間はその日によって感じ方が違う (91.1%,

平均評定値3.73) ” の諸項目であり、「時間」の比較的多くの人に共通する心理的イメージと言える。

他方、“時間は直線的に(真っすぐに)進むように感じられる”という時間の直進的進行イメージについては肯定者は41.9%であり、回答者のほぼ半数程度であった。また、“時間はぐるぐると回転しながら進むように感じられる”の肯定者は27.3%程度であり、回転進行は「時間」のイメージとしてあまり多い傾向ではなかった。項目選定の段階では、いわば佛教的時間イメージとして輪廻転生と言った螺旋的な形状イメージの可能性を考えて設定したが、一般的「時間」イメージとしては受容されなかったようである。

また、“時間は他の何ものの影響も受けない絶対的なものと思う”の項目は、時間の人知を超えた制御不可能な観念的存在としてのイメージを求めたつもりであったが、項目に対する肯定的回答は51.4%というほぼ半数程度であった。「時間」の具体的対象性を欠く調査であるのでこれ以上の回答傾向の追究は困難であろう。

さらに、“人生とは死ぬまで続く長い糸のようなものだと思う”は時間の連続性と人生の終焉で切れるような個人に与えられた時間のイメージを想定したが、連続性や直線性と言った形状表現ならばともかく、20歳前後の回答者にとって長い糸という比喩的表現は必ずしも適切なものではなかったようで、41.7%程度の肯定的回答であった。

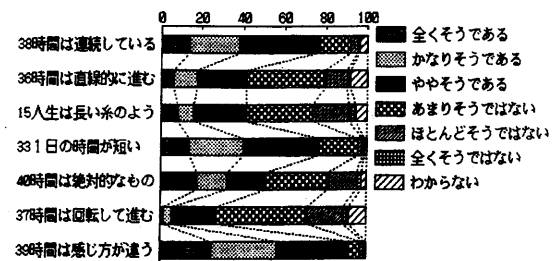


Fig.11 Frequency distribution of each rating stage for the questions included in the factor of time imagery.

### 討論

本研究では「時間」の心理的意味の構造を明らかにすることを目的として40項目から成る質問紙調査を実施した。意識時間に関する研究は哲学<sup>2,11,24,25,28,32,34,35,36)</sup>、社会学<sup>21)</sup>、医学<sup>12,13,22,23)</sup>の諸分野に関連研究が多い。それに対して心理学的時間研究では実験的研究としての時間評価や反応時間などに関するものがほとんどであり、「時間とは何か」の時間の本質についての実証的研究は僅かなものである。確かに実験や調査といった実証的方法に重きをおく心理学の立場では、そのような形而上学の問題に真正面から答えることは困難である。従って、



それを実証的追究可能なテーマに置き換えるとすれば、「時間とは人々にとってどのようなものと考えられているか」ということになろう。

こうした考えで、先の研究では<sup>17,18,19,20)</sup>「時間」の言語的概念のイメージをSD法 (Semantic Differential Method) により検討した。そこでは42反対形容語対を用いた評定値を因子分析した結果、「速度」「将来展望」「確実性」「活動性」と名付けた4因子が抽出された。抽出された因子群による全体的イメージとしては「時計的時間」を想像させるものであった。時計的イメージとは、過去・現在・未来にわたる確実で、定速的な進行イメージであり、線型のイメージであり、日常活動とのかかわり、特に多忙なときに感じる時間的制約感などである。

このようなSD法による「時間」イメージを得ることができたが、いくつかの問題点があった。中でも、対象概念の具体性の欠如が問題であろう。すなわち、「時間」の抽象的・言語的概念を対象としたことで、回答者たちが思い浮かべた具体的事物や事象が異なっていることである。そのため評定終了後に、評定中に思い浮かべた具体的事物・事象を記入させたところ、「時計」の記入例が圧倒的に多かったことが知られた。しかし、回答者の多くが時計を想定して「時間」をイメージしたとしても、それがどんな時計かは不明であり、当然、個人差がある。また、時計以外の記入例の種類が多くなことを考えると、SD法による調査では「時間」概念のざっぱなイメージの把握はできても、それらは時間の経験的意味を探る本来の目的からは周辺の知見であるように思われる。従って、時間の経験的意味を知るには、やはり具体的日常的時間行動に関する回答者共通の質問を構成して時間の意味内容の深化を図ることが重要であろう。SD法による調査で時間イメージが速度や確実性、将来展望および活動性などに関わりが深いこと、あるいは精神的不安定や積極性などの性格傾向と関係があることなどが知られたで、これらと時間との関わりのある具体的経験を示す項目を構成し、改めて「時間」の経験的意味構造を追究することにした。

質問紙調査によるこの種の研究は、既に Calabresi, R. & Cohen, J. (1968)<sup>1)</sup> や Wessman A.E. (1973)<sup>37)</sup> らのものがあるが、80以上に及ぶ質問項目の中にはおよそ時間行動とは関係のないようなものがあつたり、類似的内容を表現を変えて問うなど項目の精選に一考の余地があるように思われた。筆者の質問紙構成ではこれら諸研究で用いられた時間経験を表わす関連項目に、筆者の先行研究<sup>16)</sup> で用いた質問項目を加えて、当初、100項目に及ぶ質問紙を構成した。予備調査により項目間相関係数では高い相関係数を示す項目がいくつか認められたことで項目群を精選し、最終的には40項目に絞り込んだ。

また、情緒的な側面に関連するような事項については既存の心理検査 (ここではYG性格検査) を用いることにした。

『時間的態度に関する調査』と名づけた質問紙について男女大学生547人による回答を因子分析した結果、「時間不安」「将来展望」「時間活用性」「時間観」と名づけた4因子を抽出した。時間不安や時間活用性はこれまでの研究の中でもよく抽出される因子である (例えば、Wessman, A.E.<sup>37)</sup>) が、本研究での「時間観」因子は心理学的研究の中では稀な因子であろう。そのような狙いを持って構成した項目群の故であろう。また、「将来展望」は、どちらかと言えば「将来不安」的な内容である。あるいは将来に対する不確実感のような内容である。また、時間不安と将来展望は内容的に現在および将来における方向性の中での不安や焦り、あるいは不確実感である。質問紙の内容構成においては“過去”について問うものも含まれてはいたが、顕著な評定傾向の偏りは認められなかった。調査対象者が若い学生であることに起因してのことであろう。高齢者や重篤な患者らを対象とすれば、自ずと若者の傾向とは異なるものと想像される。例えて言えば、前だけ向いて走れる喜びは、後ろしか残されていない状況になって初めて失われたその価値に気づくと言えるかも知れない。

この調査研究の因子分析においては、因子得点による分析を多用し、回答者の性別や、性格型などの属性を分類規準として平均因子得点を比較することにより因子の特徴を明らかにすることに努めた。その結果、例えば、性差が比較的現れやすいのが第II因子 (将来展望因子) と第IV因子 (時間観) であった。男女間の平均評定値プロフィールを見ると、将来展望では男子の比較的高い評定傾向、つまり将来に対する不安・不確実感は男子の方が高い傾向が認められた。また、第IV因子 (時間観) については、女子の方が高得点傾向にあり、SD法による時間イメージ調査<sup>17)</sup> においても見られた女子の「時間」に対する感情移入的傾向の著しさが示された。

因子得点を指標に性格類型による違いをみると、第I因子 (時間不安) において顕著であった。すなわち、E型群やB型群といった精神的不安定・社会的不適応群においてそれを共通因子とする傾向が高いことが知られた。言い換えれば、時間を意識せざるを得ないような状況は、経験的には時間に追われているようなことが多いということであろう。「時間」概念のSD法による調査で抽出された活動性要因についてと同じような解釈がここでも可能であると思われる。

“時間を考える”状況は行動目標とそれに対する個人の欲求との関係が深い。目標が正の誘因価を帯び (魅力

的対象),そこへの接近欲求が強い心理的事態では,接近遂行が順調ならば特に時間を意識することはないであろう。しかし,思ったほどには目標接近できない意識が生じればそれまでの時間を長く感じ,残された許容時間を僅かなものに(短く)感じるであろう。焦燥的事態ではなおのこと残された時間を短く感じるであろう。

本調査では,時間不安項目と,将来(不安)展望項目の評価が高かったのはY G検査によるEとB型であった。両群は精神的に不安定で,不適応な点で共通であり,イライラして神経質で,現事態を思うにまかせぬ事態と感知するような性格型の人ほど時間経過に対しては神経質であるとする本調査結果はほぼ上述のような説明仮説を支持するものであったが,行動目標と自己の関係(目標志向態度)と時間意識との細かな対応についてはなお今後の検討が必要であろう。

【本研究は,平成4年度文部省科学研究費一般研究C(課題番号03610047)による研究の一部である】

## 文 献

- 1) Calabresi, R. & Cohen, J. Personality and time attitudes. *Journal of Abnormal Psychology*, 1968, 73, No.5, 431-439.
- 2) Chapman, T. *Time: A philosophical analysis*. 1982, Reidel.
- 3) Cohen, S.I. & Mezey, A.G. The effect of anxiety on time judgment and time experience on normal persons. *Journal of Neurology Neurosurgery and Psychiatry*, 1961, 24, 266-268.
- 4) Cottle, T.J. Temporal correlates of the achievement value and manifest anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*. 1969, 33, 541-550.
- 5) Cottle, T.J. Temporal correlates of dogmatism. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 1971, 36, No.1, 70-81.
- 6) 江口恒男 性格診断マニュアル—企業におけるY Gテストの応用と実例 1976, テクノ
- 7) Eissler, K.R. Time experience and the mechanism of isolation. *The Psychological Review*, 1952, 39, 1-22.
- 8) Eysenck, H. J. Personality and the estimation of time. *Perceptual & Motor Skills*, 1959, 9, 405-406.
- 9) 林 達男・野田又夫・久野 収・山崎正一・串田孫一(編)『哲学事典』 1968, 平凡社
- 10) Husserl, E. *Zur Phanomenologie des Inneren Zeit Bewusstseins*. (立松弘孝訳『内的時間意識の現象学』 1967, みすず書房)
- 11) 伊東俊太郎 存在の時間と意識の時間 村上(編)『時間』所収 1981, 東京大学出版会
- 12) 木村 敏『自己・あいだ・時間—現象学的精神病理学—』 1980, 弘文堂
- 13) 木村 敏『時間と自己』 1982, 中公新書
- 14) Knapp, R.H. & Garbutt, J.T. Time imagery and the achievement motive. *Journal of Personality*, 1958, 26, 426-434.
- 15) Knapp, R.H. Attitudes toward time and aesthetic choice. *The Journal of Social Psychology*, 1962, 56, 79-87.
- 16) 甲村和三・河野慶三・片山幾代・野尻久雄・宮崎光弘・小笠原昭彦 心理的時間に関する実験的研究(3)—Duchenne型筋ジストロフィー患者と健常大学生の時間的展望の比較— 名古屋工業大学学報, 1980, 32, 9-16.
- 17) 甲村和三 心理的時間に関する実験的研究(7)—時間の意味的構造— 名古屋工業大学学報, 1985, 37, 7-14.
- 18) 甲村和三・小笠原昭彦 心理的時間に関する実験的研究(9)—健常学生群と比較した各種疾患患者の「時間」イメージ 名古屋工業大学学報, 1987, 39, 9-16.
- 19) 甲村和三・小笠原昭彦 Duchenne型筋ジストロフィー患者の「時間」および「将来」に関するイメージの分析 心身医学, 1988, 28, No.4, 317-323.
- 20) 甲村和三 心理的時間に関する実験的研究(11)—Y-G性格型による「時間」イメージの比較— 名古屋工業大学学報 1989, 41, 11-18.
- 21) 真木悠介 時間意識と社会構造「思想」1980. 9月～1981. 5月 岩波書店
- 22) Minkowski, E. (中江育生・清水 誠・大橋博司訳)『生きられる時間—現象学的・精神病理学的研究』 1(1972), 2(1973) みすず書房
- 23) 村上陽一郎・木村 敏 時間と人間(対談)(『時間論の地平』, 「理想」所収) 1977, 2月号, 理想社
- 24) 村上陽一郎編 『時間と人間』(東京大学教養講座) 1981, 東京大学出版会
- 25) 中埜 肇『時間と人間』講談社現代新書, 1976, 講談社
- 26) 根本橋夫・中沢千鶴加 時間不安と自我同一性, 達成動機, および自己像との関係 千葉大学教育学部研究紀要, 1990, 38(第一部), 47-54.
- 27) 大黒静治 時間評価研究の概観 心理学研究, 1961, 32, No.1, 44-53.
- 28) 大森莊蔵『時間と自我』 1992, 青土社

- 29) Orme, J.E. Time studies in normal and abnormal personalities. Acta Psychologica, 1962, 20, 285-303.
- 30) Orme, J.E. Personality, time estimation and time experience. Acta Psychologica, 1964, 22, 430-440.
- 31) Richard, D.R. & Slane, S. Punctuality as a personality characteristics : Issues of measurement. The Journal of Psychology, 1990, 124, No.4, 397-402.
- 32) Sherover, C.M. The human experience of time. 1975, New York Univ. Press.
- 33) 武内信子 女子学生のアイデンティティ確立と時間体験様式 ノートルダム清心女子大学紀要 (生活科学・児童学・食品栄養学編), 1988, 12, No.1, 1-8.
- 34) 滝浦静雄 時間の言葉 『月刊エプステーメ』 1975, 12月号, 104-106, 朝日出版社
- 35) 滝浦静雄 『時間—その哲学的考察』 1976, 岩波新書, 岩波書店
- 36) 滝浦静雄 生きられる時間 (「理想」所収) 1977, 2月号, 理想社
- 37) Wessman, A.E. Personality and the subjective experience of time. Journal of Personality Assessment, 1973, 37, No.2, 103-114.
- 38) Yonge, G.D. Time experiences, self-actualizing values, and creativity. Journal of Personality Assessment, 1975, 39, No.6, 601-606.

### 時間的態度に関する調査

時間はわれわれの日常生活に大変かわりやすいものです。この調査はどのような皆さんの時間的行動の傾向や日頃の時間イメージなどを調べるものです。項目をよく読んで、**一般的・健全的ではなく、皆さん自身が時間に対してどのような考えや態度をお持ちかを正直にありのままをご回答下さい。**回答はその程度を示す数字を○で圈んで示して下さい。以下の40項目すべてについてお答え下さい。

名古屋工業大学心理学研究部

以下の( ) 内に、適れなくご記入下さい。

1. 所属 ( ) 大学      2. 学年 ( ) 年度      3. 年齢 ( ) 歳  
 4. 氏名 ( )                      5. 性別 ( ) 男・女

		全く ありません 4	かなり ありません 3	やや ありません 2	あまり ありません 1	ほとんど ありません 0	わからない ?
<b>【あなたには】</b>							
1. スケジュールに従って、軌道かつ能率的に行動する	5	4	3	2	1	0	?
2. やらなければならないことをするのに、十分な時間がないと感じることが多い	5	4	3	2	1	0	?
3. 気が変わりやすい	5	4	3	2	1	0	?
4. 自分の将来がどうなるか予想できない	5	4	3	2	1	0	?
5. 自分のことをよく知っていると思う	5	4	3	2	1	0	?
6. 何をしてもせつからである	5	4	3	2	1	0	?
7. 毎日の生活が過激的なものであると感じる	5	4	3	2	1	0	?
8. 将来のことについては、どうしようもない	5	4	3	2	1	0	?
9. 仕事にかかるまでに多くの時間を費やしてしまう	5	4	3	2	1	0	?
10. 大きな目標に向かって、毎日の生活を送っている	5	4	3	2	1	0	?
11. 古くなったものは捨ててしまっ、新しいものに買いたえたいと思っ	5	4	3	2	1	0	?
12. 毎日が時間と闘いかけられているよう	5	4	3	2	1	0	?
13. 何をすることも時間がかかる	5	4	3	2	1	0	?
14. 仕事をし終わるのは、いつも期限ギリギリである	5	4	3	2	1	0	?
15. 人生とは死ぬまで続く長い旅のよう	5	4	3	2	1	0	?
<b>【あなたは】</b>							
16. 何をすることも前もって予定を立てる	5	4	3	2	1	0	?
17. 何となく毎日を過ごしている	5	4	3	2	1	0	?
18. 何年も先のことまで考える	5	4	3	2	1	0	?
19. 毎日の生活に満足しなさを感	5	4	3	2	1	0	?
20. 何事につけマイペースでやっ	5	4	3	2	1	0	?
21. やり残していることが多いに思	5	4	3	2	1	0	?
22. 締め切りには必ず間に合わせるよ	5	4	3	2	1	0	?
23. ある一つのことをやり遂げるこ	5	4	3	2	1	0	?
24. 人に誇られるとすぐにはイライ	5	4	3	2	1	0	?
25. 焦りを感しやすい方である	5	4	3	2	1	0	?
26. 一つのことには集中できず、す	5	4	3	2	1	0	?
27. 約束時間には遅刻の方である	5	4	3	2	1	0	?
28. 将来のことについていろいろ	5	4	3	2	1	0	?
29. 人を待たせてもそれほど	5	4	3	2	1	0	?
30. 過ぎてしまったことを、いつ	5	4	3	2	1	0	?
くよくよ考えることが多い							
31. 昔はよかったと思っ	5	4	3	2	1	0	?
32. 仕事は速く仕上げるこ	5	4	3	2	1	0	?
の方が大事だと思う							
33. この頃、1日の時間を短く	5	4	3	2	1	0	?
34. 時間が短つのが気になる	5	4	3	2	1	0	?
35. 自分のはんびりや(無	5	4	3	2	1	0	?
天的)である							
36. 時間は直線的に(真	5	4	3	2	1	0	?
っすぐに)進むように感じられる							
37. 時間はぐるぐる	5	4	3	2	1	0	?
と回転しながら進むように							
38. 時間は流れるこ	5	4	3	2	1	0	?
となく流れるように感じられる							
39. 時間はその日	5	4	3	2	1	0	?
によって感じ方が違							
40. 時間は他の何	5	4	3	2	1	0	?
もの影響も受けない絶対的なものと思							

◎ 記入もれはありませんが、一旦、圈かめて下さい。  
 ◎ ご協力、ありがとうございます。

Questionnaire on time attitude used in this survey.